猫と昔話

難波美和子（比較文学）

○十二支と猫

60歳になることを還暦と言って祝うのは、十干と十二支という時を数える二つのシステムが60年ごとに合致することによる。天が誕生時と同じ状態になったとし、人間の生も新たな始まりを迎えるとするのである。還暦が60年であるのは、この二重システムが十進法と十二進法を用いているからで、十と十二の最小公倍数が60であるという法則による。暦法にはしばしば十二進法が用いられ[1]、暦法や幾何学を確立する上で重要な役割を果たした。少なくとも、十一支や十三支ではなかったおかげで、還暦は人生の中で祝えるものになっている。

十干は五行（木火土金水）によってイメージ化され、十二支は動物が配されることで、順序や方位・時間が性格づけられた。やはり動物の方が親しみやすかったのだろう。十二支は中国文化の伝播とともに、朝鮮半島、日本列島、インドシナ半島、モンゴル高原、チベット高原、更に中央アジア西部まで広がった[2]。年を動物の名で呼び、動物の正確でその年を占うという面白さが、人々を惹きつけたのだろうか。そして12ヶ月で１年が終わり、新たな１年が始まるように、12年で一つのサイクルが終わり、新たなサイクルが始まる。

十二支とその動物たちが定着してみると、この地域の人々は同じことに疑問を持つに至ったらしい。

「なぜ十二支には猫がはいっていないのか[3]？」

十二支に当てられた動物はほとんどが、地域差はあるが、人々の生活と関わりが深いものだった[4]。ところが、その中に犬はいるのに猫はいない。猫はいないがねずみはいる。それも最初に。それを大いに不思議に思った人々がいた。これには何か理由があるに違いない。

日本で「十二支の由来」と呼ばれる昔話はそれを説明する。

十二支を定める集会の日にちを忘れた猫はねずみに騙され、遅れて到着した。

このために猫は十二支に入れず、それを恨んで猫はねずみを襲うようになった。または（更に）ねずみは牛の背に乗って行き、到着の時に飛び降りて一番乗りになったので、十二支の最初に置かれた[5]。

このタイプの話は伝承範囲が広く、中国や朝鮮半島だけではなく、西はボルガ河畔にまで至る[6]という。類似性が高いので、伝播したのではないかと思われるが、様々な地域の人々が、十二支に猫が含まれないことを疑問に思い、その理由としての説話を喜んだ、ということは確かなようだ。

ではなぜ、十二支に猫は数えられなかったのだろうか。暦や方位の問題を扱った古代中国人がことごとく猫嫌いだったという可能性もなくはない。あるいは、猫が文化的に否定的な記号であったり、虎が入っていることなどが考えられる。十二支への動物の配当は中国の戦国時代（紀元８世紀から３世紀）ごろには発生していたと見られるようだが、その時代に、猫も中国に入ってきたらしい。その頃にはまだ、猫は虎ほども身近な存在ではなかったのかもしれない[7]。しかし十二支に外れたことが説話になったということは、やがて猫が身近なものになったことを意味する。そのような身近さは、他の昔話にどのように反映しているだろうか。

○昔話と猫――日本とヨーロッパ

猫にまつわる諺や慣用句は様々な社会で数多く知られており、生活への深いつながりをうかがわせる。猫のしぐさによって天候を占うほか、幸運や不運のしるしを読み取るものが多い。長命な猫は魔物に化すとか、猫そのものが災いをもたらすものとする諺も多い。その一方で、猫が主要な役割を担う昔話は意外に少ないようだ。「長靴をはいた猫」は有名だが、そのほかには猫はあまり活躍しない。いや、猫の活躍の場は、恐怖や呪いの物語にあり、伝説や世間話の色彩が強い。昔話の猫も恐ろしい力を背景にしていると考えられるものが多いのである。猫はどうやら不可思議な存在であった。

日本の昔話では、歳を経た猫は変化すると語られる。

猟師の家の年老いた猫は、猟師が持っていく弾の数を数えていた。猟師は化け物に出会う。化け物は猟師が弾を撃ち尽くした所で襲い掛かって来たが、隠

し弾で撃退した。我が家に戻ると、老猫がいなくなっていた。化け物は家の茶釜の蓋を弾除けにしていた。(「猫と茶釜の蓋」)[8]

ただ化けるというよりは、猫は恩を忘れる、あるいは長年飼った猫は怪異に変じて害をなすという観念が、このような昔話の背景に見られる。老猫が老母を食い殺して化けていたという「鍛冶屋の婆」の類話にみられるモティーフも同様である。年老いた猫は猫山に集まるとか、猫山で法力を得るともいう。

ある人が山中で道に迷ったが、立派な屋敷を見つけて一晩泊めてもらう。すると昔飼っていた猫がやってきて、ここは「猫屋敷」だから逃げなさい、と言う。逃げ出すと追いかけられ、水を掛けられた。水が掛かったところだけ猫の毛が生えた。(「猫山」)[9]

この話では、長年飼われた猫は人を助けてくれるが、化け猫に違いはないようだ。習俗として、猫は死体に「憑く」ので、死者が出た時には飼い猫は閉じ込めておかなければならないともいう。「猫檀家」と呼ばれる話では老猫が棺を木の上に吊り上げて、下ろさないという力を見せる。飼い主の老僧が祈ると棺を下ろし、僧は礼をもらって豊かになる。これが猫が死体に憑くという観念を前提にしていることは確かだ。

このように猫は化けたり通力を持って人に害をなすものとして語られるが、それは足音を立てないで近づくこと、突然爪を出して引っかくといった能力が信用ならないものとして人間に受け取られたためかもしれない。目が光ったり、毛を逆になでることで静電気が起こることなども猫を不可思議なものとのつながりを感じさせる要素である。そして老猫がしばしば行方知れずになるということも想像力を掻き立てた。いなくなった猫たちは目的地があり、猫が集まっているという「猫山」の昔話となった。

このような長年飼われる猫が不気味なものであるのに対し、ねずみや犬との対比で語られる猫は、ほぼ「ふつう」の猫である。犬と猫は人間の大事な伴侶として語られ、ともに人間に報いようとする。

貧しい爺が猫を飼っている。あるとき犬を助ける。昔飼っていた蛇がお礼に

宝の玉をくれる。その玉でいろいろなものを出し、商売を始めるが、番頭に盗まれる。犬と猫は玉を取り返しに行く。猫がねずみを脅し、たんすの奥に隠されていた玉を取り戻す。共に逃げる途中、犬が猫を噛んで玉を落とす。仕方がないので、魚を土産に帰ると魚の腹から宝の玉が出る。(「犬と猫と指輪」)[10]

この話では猫と犬は共同で働くだけだが、類話によっては、猫が家の中で飼われ、犬が屋外に置かれる理由を説明する。猫は仕事はなくとも餌を与えられ、犬が番犬として働かなくてはならないのは、猫と犬が玉を取り戻して帰ってくる途中で玉を落とすのは、犬のせいで、取り返すのは猫の知恵による。そこで猫は家の中で大事にされ、犬は外に出されている。それ以来猫と犬は仲が悪くなった。仲たがいの原因は猫にあることもある。この「犬と猫と指輪」の宝物は日本では宝の玉だが、広い伝承圏を持っていて、ヨーロッパや西アジア、インドにも見られる。

ヨーロッパでも、猫はあまり幸運とはいえない。特に中世以降は魔女と結び付けられ、災いのもととされた。飼い主を襲う猫や怪我をさせられて復讐をする猫など、恐ろしい話、怪談などが多い。強い魔力を持つものと言う観念は日本と共通する。

一方で、猫は幸運をもたらすものにもなる。「ウィッティントンの猫」は実在の人物と結び付けられているが、イングランド以外にも広がっている話である。

父親が三人の息子たちにそれぞれ雄鶏、麦刈り鎌、猫を与え、運を試すようにと命じる。息子たちはもらったものを持って、雄鶏、麦刈り鎌、猫が知られていない国を探す。末息子は猫がいなくて、ねずみがはびこっている島へたどり着き、ねずみを獲る猫を売って金を積んだらば一頭をもらう。三人はそれぞれに金持ちになった。猫を知らなかった国では、猫を恐れ、猫を退治しようとして城を壊してしまった。(「三人の幸運児」)[11]

ここでは猫には本来、魔力はないのだが、猫を知らない人々が恐怖に駆られることが笑話的に語られる。そのようなよくわからない恐れが、猫を身近にする人々にもあるからこそ、無知な人々への笑いとして語られているのではないだろうか。そして、猫がいない国で猫を売って大もうけをする話は、遠く離れた地域を結ぶ

交易の物語を反映すると共に、猫という動物との出会いの記憶の残存を思わせる。

○昔話の猫――インド

インドの昔話の中では、化けたりして恐ろしい猫はあまり登場しないように思われる。しかし、「殺すことのできない猫」のようにやはり不可思議な存在とする話は存在する。猫には七生、と日本では言い、イギリスでは猫には九つの命がある、というように、猫の命は捕らえがたいものという考えは多くの地域で共通して見られる。猫山という話を産んだのが、老猫が行方知れずになる、という現象だとするならば、同様のことが、こうした死なない猫という考えの背景にあるのではないだろうか。

インドの猫の話には不気味さがなく、むしろ弱いが賢い、または狡知を持つとされる。狡知は他の地域でもねずみとの駆け引きの中で見られるが、インドの猫の賢さや狡知は、虎やライオンなどの対比によって認知されるようなものかもしれない[12]。猫に不気味さを感じるよりも、虎との類似性を見、いったい虎と猫はどういう関係にあるのか、という疑問が立てられたようだ。デカン高原やグジャラートなどでは冗談で「猫は虎の母方のおば」とみなされるという[13]。猫はただ人間のそばにいる動物、ではなく、野生動物とも関係づけられる。しかし、昔話では、おばである猫は飢えた甥の虎にちゃんと食べ物を与えなかったので、恨まれている。だから虎を見ると猫は逃げる[14]。それは、猫が人間から餌をもらう事で野生動物とは対立することも示している。ある話では、猫は虎に様々なことを教えたが、後ろへ飛び退ること、または木登りを教えなかったので、猫は虎から逃れることができるという。つまり、猫は虎を恐れているが、虎よりも優れた技を持っており、賢いのである。虎の身内である猫は、必ずしも人間に従うもの、とも捉えられていない。

「犬と猫と指輪」はインドでも各地で伝承されていたことがわかるが、他には飼われている猫の話は少ない。飼われている猫の話としてはカシュミール地方の「王妃になった猫」がある。

王が一年以内に子どもを産まないと追い出すと妻たちを脅すが、子どもは生まれなかった。猫が子どもを産んだので、妻たちはその一匹を取って、王女が生まれたと言い、その子は結婚するまで父親に会ってはならないと、王を誤魔

化した。王女が結婚する年になると、王はふさわしい王子との結婚を決めた。王の妻たちは王子にすべてを明かしたので、猫と結婚した王子は妻を誰にも見せずに世話をした。王子の母が息子の妻に会えないのを悲しんで、猫に恥ずかしがらすに出てくるように心を込めて話しかけたので、猫は自分の身を嘆いて神に助けを求めた。女神パールヴァティーがシヴァ神の心を動かすことで、猫は人間になり、王子と共に父王に会いに行った。(「王妃になった猫」)[15]

この猫の親は、おそらく王宮で買われているペットとしての猫である。まさにペットが人間として扱われるといういささか現代的な要素を見てしまいそうになる[16]。この猫には魔術的な力はなく、変身は神の恩寵による。インドでは飼い猫の話をほとんど見つけられないため、彼らが人間に対して忘恩であるかどうかはわからない。しかし、狡賢く振舞う動物として語られ、ちょうど、ヨーロッパの狐のような振る舞いをする[17]。

あるとき、猫がガンジス川へ巡礼に行くことにする。途中でねずみ、鳩、鶴、もう一羽の鳥が同道する。ガンジス川に着くと、猫は鳩、鳥を食べてしまう。ねずみは穴に逃げ込む。鶴は猫が眠っている間に首に縄をつけて飛び立ち、猫を吊るす。[18]

この猫が最初からたくらみを持っているかどうかは語られないが、ガンジス川巡礼などの宗教的行為によって他の動物は油断し、猫に近づいてしまい、食われる。この時、ねずみなどの通例猫の獲物となっている小動物は猫の手を逃れる。昔話の猫は狡賢いが、すべての動物を騙せるほどではないし、強くもない。

○猫嫌いと猫好き

猫に関わる諺や習俗の多くは、猫を恐ろしいものと結び付けており、昔話もそのような習俗との関わりをうかがわせる。しかしたいていの諺が正反対のものを持つように、災いをもたらすものであると同時に幸運や富をもたらすしるしになることもある。七年、または九年飼った猫は化ける、という観念が、同時に通力を得た猫が恩を返すという話になる。「長靴をはいた猫」もいわば化けた猫の報恩と見えなくもない。善なる性質と忌むべき性質は背中合わせで、それを見る人

間によって正反対になるものなのだ。猫の力に対する同じ観念が、化けて忘恩の行為をする猫と、報恩する猫というまったく別の語りを生む。この違いは、言い換えると語り手の猫嫌いと猫好きという感性に基づくものではなかったかと推測される。

猫嫌いと猫好きは常にいて、せめぎあっていたようだ。魔術的な猫の力への恐れ、気ままな猫への不信が生む猫の忘恩の説話に対し、身近な猫への親しみやかわいらしい仕草への手放しの情愛が猫の報恩の昔話を求める。猫の魔物が死体を奪う、と猫嫌いが物語化すると、猫好きは本来の飼い主に恩返しをするため、と語りなおす。もっとも猫好きは報恩じたいを求めなかったのかもしれない。だから、どうやら、猫嫌いのほうがことわざや習俗の上では優勢だったように思える。

猫好きであれ、猫嫌いであれ、猫に求められるものは、規則や習慣、しがらみに捕らわれない自由さで、だからこそ、報恩といった約束事とは猫の物語は結びつきにくいのかもしれない。最近の都市伝説でも、猫には恐ろしさ、敵対するものへの報復という要素が強く見られる。「猫かわいがり」される猫が増えても、猫は通力を失いそうにない。

野良猫は化けないの…？
（トルコ、プリエネ遺跡で出会った猫）

注

1　メソポタミアでも黄道十二宮をはじめとして、12進法が用いられている。

2　ロシア、東ヨーロッパでも十二支はあるらしい。十二支の伝播なのか、黄道十二宮の年への転化かは未確認である。

3　ただし、地域によっては猫が含まれている。ベトナム（卯→猫）、ブルガリア（虎→猫）など。

4　日本では羊、虎もほとんど想像上の動物である。ただ、実在するものとして認識されていた。十二支の中で辰すなわち「龍」だけは空想上の動物とされているが、青木良輔は「龍」は殷の時代には黄河に生息し、その後の気候変動で絶滅したクロコダイル「マチカネワニ」の仲間ではないかとしている。絶滅したことによって「龍」の実体が不明となり、想像上の動物となった。その後、南方で新たなクロコダイルに出会ったとき、「鰐」という文字が考案されたのであろうとする。（『ワニと龍　恐竜になれなかった動物の話』平凡社、2001年）そのように考えると、十二支に動物が配された時代には、龍は実在して恐怖や畏

怖の対象として虎と同等の地位にいたのかもしれない。

5　『日本昔話通観　第17巻　鳥取』同朋舎、pp.917-918

6　日本民話の会編『決定版　日本の民話事典』、講談社、pp.128-129

7　猫は、現在ではあまりにもありふれた、人間に最も近しい動物のひとつだが、多くの社会にとっては新しいメンバーであるらしい。犬が一万年以上を人類と共に暮らし、ほとんどの社会で飼われているのに対し、猫は長い間一般的な家畜ではなかった。約四千年前にエジプトで家畜化されたリビア猫が現在のイエネコの先祖であるが、それほど速やかには広がらなかった。中国には紀元前500年ごろに、日本は紀元後600年前後にイエネコの飼養が始まったとされる。イギリスでのイエネコの飼養の確実な記録（猫の保護を命じる法律）は紀元後936年という（Encycropaedia *Britannica*, 2002）。

8　柳田國男監修『日本昔話名彙』日本放送協会、p121.

9　『日本昔話通観　第24巻　長崎・熊本・宮崎』同朋舎、p.278.

10　日本民話の会編『決定版　日本の民話事典』講談社、pp25-27.

11　高橋健二訳『完訳　グリム童話集２』小学館、pp.309-313.

12　インドでも家猫は外来の動物だが、周知のように虎やライオンなどの大型の猫科動物が先住しているので、恐ろしさは虎やライオンのものであったかもしれない。しかし、今回、中国の猫がどのように語られているか検討していないので、共通性があることかどうかはわからない。

13　R.E.Enthoven, *The Folk Literature of Bombay*, (reprint), p.216.

14　M.S.H.ストークス（アダムス保子訳）『インドの民話』大日本絵画、pp.131-132.

15　Knowles, H., *Folktales of Kashmir*, 1892, pp.8-10.

16　人間扱いされるペットの猫、という点では日本は伝統がある。一条天皇の飼い猫が人間同様の出産祝いをされたという記事は有名である。飼われたイエネコの年代の確実な最古の記録である宇多天皇の日記、寛平元年（889年）の記事(『増補　資料大成　歴代宸記』臨川書店)でも、「私の猫は他の猫よりきれいですばらしい」というようなもので、猫好きの習性はあまり変わらないようだ。

17　一般的には、インドでは、ヨーロッパの狐に相当する狡賢い動物はしばしばジャッカルと訳されるイヌ科のドールである。

18　前田式子編訳『インドの昔話　上』春秋社、pp.165-168.

（本学准教授）